

巻 頭 言

去る2月21日、私の退官記念講演会で、私は「数学教育と社会」と題して、数学教育の目的＝理念と社会的制度、教育思想、文化的状況などとの関連について、プラトンの数学教育観から、現在に至るまでのそれを紹介した。その意図は「何のための数学教育か？」の間に答えるための背景を示そうとしたのである。

この問に対する答えは一義的ではありえず、極端に言えば、人それぞれによって異なるはずのものであろう。それは理念＝思想だからである。しかし教育目的は教育現実（実践）の先に立って導く言明であるから、共主観的（共通的）なものでなければならない。そのためには「教育目的論」について批判的議論の場を意図的に設けなければならない。

最近「教育課程審議会」から次期指導要領の中間答申案が出された。いつでもそうであるが、かかる答申案が出されても、指導内容についての議論は活発になされるが、教育目標についての議論はあまりなされてこなかった。

わが学会では、理論的・実証的な研究活動は盛んになされ、また優れた研究が数多く見られるが、「教育目標論」についての研究と議論はきわめて少ないと思われる。（この傾向は他の学会においても見られる。）

わが学会の年会で、時には「何のための数学教育か？」について討論がなされることを期待したい。

世話人代表 竹内 芳男

（山形大学教育学部長）